

SRID キャリア開発

国際開発研究者協会 (SRID: Society of Researchers for International Development) は、国際開発関連機関（国際機関、政府関係機関、NGOs、開発コンサルタント企業等）で働く事を希望する人達のキャリア開発を支援するため、カウンセリング、能力開発向上研修等のキャリア開発事業を実施しています。その一環として、キャリア開発事業受講生や国際開発関連機関への就職を目指す人達にキャリア開発に関する情報を提供するため、「SRID キャリア開発」を年2回、3月と9月に配信しています。国連機関、世界銀行（世銀、WB）、アジア開発銀行（アジ銀、ADB）、アフリカ開発銀行（AfDB）、欧州復興開発銀行（EBRD）、国際協力機構（JICA）、開発コンサルタント企業等の国際開発関連機関に勤務経験のある SRID 会員の知見とネットワークを活かし、SRID ならではの情報を発信しています。

第6号では神戸情報大学院大学副学長の内藤智之 SRID 会員からの情報通信技術（ICT）と開発に関する寄稿と2024年1月13日及び20日に実施した国際開発金融機関就職希望者のための国際プロフェッショナルコース（IDPC on MDBs）の報告を掲載しました。

情報通信技術（ICT）と開発：開発課題を客観的に分析する能力と「進化し続ける ICT に対する積極的な理解」が鍵

はじめに

「憧れるのをやめましょう」。このフレーズは、説明不要のオータニさんの名言ですが、個人的には流行語大賞になるべき名言だったなあ、と思っています。この文章を読まれている学生や若手社会人で「国際開発のプロ」を目指されている皆さんへ、本文結語を先に申し上げれば、「憧れるのをやめましょう」。

世界銀行の大先輩であり、大自然の中の素敵なお宅、剣道、登山など、常に前向きに人生を楽しまれるプロとしても大尊敬する鈴木博明さんから、「情報通信技術（ICT）と開発」のコンテキストで「SRID キャリア開発」に寄稿してほしい、と正月に御依頼を受けたのですが、正直に吐露すれば「えーマジ、気が引けるなあ…」というのが当初の胸の内でした（笑）。何故なら、SRID には私が JICA で若造職員だった時の大ボスの皆様や、鈴木さんを含めてこれまで様々な場面でお世話

になってきた名だたる「本チャンのプロ」が数多くいらっしゃる、この場で何を書いても「ナイトーくんもまだまだだね～」と言われてしまう様子しか、私にはイメージできないからです（笑笑）。

しかしながら、3 年ほど前に小さな大学院に教員として勤務しはじめ、50 代もあと数年で終わるような年代の私が「SRID キャリア開発」の主旨である「国際開発のプロを目指す若い世代へ、出来る限りの経験・知見の共有」を行わせて頂くことは、SRID 会員としてのみならず、教育者の端くれとして真正面から取り組むべきシゴトのひとつであると自覚しております。名だたる大先輩皆様には心底恐縮しつつも、拙文をご一読いただく若手の皆様の一助になればという真摯な想いと共に、締め切り後の週末夜に湘南の自宅でひっそりと、以下の駄文を認めさせていただきました。御笑読いただければ幸いです。

「ICT と開発」という開発分野は存在するのか？

「ICT と開発」というテーマに対して、様々な捉え方があります。それは、「環境と開発」とか「ジェンダーと開発」とか、ひいては「教育」「保健」「農業」等々



内藤 智之（ないとう ともゆき）
建築学科卒→ゼネコン・エンジニア（8 年）→国際関係学修士（華人経済ビジネス／デジタルエコノミー）→JICA 職員（11.5 年）・博士後期課程（単位取得満期退学）→世界銀行職員（4.5 年）→JICA 国際協力専門員（5 年）→神戸情報大学院大学教員（もうすぐ3 年：現職）。ウィンドサーフィン全日本選手権2 位（2022 年）。YouTube「トモ先生のデジタルエコノミー・チャンネル」毎週末更新中です。https://www.youtube.com/@-tomosdigitaleconomy2814。

において様々な細分化された分野が有るのと同様ですが、私自身の解釈としては「とにかく「ICT を使って世の中を良くしよう」という思考や試行、実践であれば、何であれ「ICT と開発」の範疇なのだ、と考えています。

「ICT と開発」というコンテキストには、それなりに時代に応じた変遷が存在します。技術面における世界的な変遷だけを単純化して表せば、『1995～2004 年：検索とブロードバンド (BB) 勃興の時代』、『2005～2014 年：スマホと SNS 勃興の時代』、『2015～2022 年：ビッグデータと機械学習勃興の時代』、そして『2023 年以降：生成 AI 勃興の時代』となります。このトレンドや経済成長への影響を理解した上で、開発途上国毎の社会経済状況に合わせて、ICT をどのように政策や戦略、計画に組み込んでいくか、という思考と試行、そして実践が「ICT と開発」の本論です。

現在、国際開発実務に携わる多くの方が「ICT、特にインターネットの存在は、もはや水や電気と変わらない社会インフラだ」と言われますが、全くその通りです。しかしながら、2022 年末時点で全世界人口比 34%、27 億人もの人々が、BB インターネットの恩恵を受けていません。世界中で「電気の無い暮らし」をしている人々は約 12 億人、同様に「安全な飲料水にアクセスできない人」は約 20 億人です。そういう意味では、BB インターネットの普及率はまだまだ、電気や水の普及率に及んでいません。

デジタル・ネイティブ世代と称される 1990 年代半ば以降に生まれた方々は、上述した「検索と BB 勃興の時代」以降の急速なデジタル化の中で育ってこられているので、インターネットが存在しない現実世界をイメージしにくいでしょう。なので、どんな最貧国や紛争国でも、アイデアひとつで先進国と同じようなデジタルサービスを創り出すことが可能だ、と単純に考える方にもよく遭遇しますが、全世界人口比 34%が BB インターネットの恩恵を受けることが出来ていないという現状を認識した思考が実際に出来るようになると、「ICT と開発」に関するリアルな議論を開発途上国の人々と交わせるスタートラインに立てるのではないかと考えます。そこから先は、思考と試行、そして実践へとつながるブルーオーシャンが待っているのが、「ICT と開発」という分野に取り組む醍醐味だと思います。



神戸情報大学院大学の講義風景
IDPC にも同大学院から数名の参加があった

「ICT と開発」を専門とするために必要な知識や経験は何か？

ずばり、「開発課題を客観的に分析する能力」と「進化し続ける ICT に対する積極的な理解」、この 2 つだけです。

前者は、少し訓練と経験が必要です。開発課題への関心は、人それぞれ異なります。しかしながら、国際開発の実務者になってしまうと、関心の有無に関わらず、業務として眼前の課題に取り組む日々が待っています。従って、どんな課題に直面しても、関連する開発条件を丁寧に調査分析して、主観ではなくエビデンス・ベースで客観的に理解し、周囲に対して「私はこう理解しますが、誤解があれば指摘してください」という真摯な開陳ができるような能力を、訓練と経験を通じて身に付ける必要があります。これは、ICT 分野のみならず、すべての開発課題に対して実務者として備えるべき共通的なスキルです。

一方で、後者は、解決すべき課題に対して有効活用可能な ICT (技術) の選択肢と組み込み方に関して、受益者の立場に立った思考と試行、そして実践を行うことが求められる能力ですが、これはデジタル・ネイティブ世代の方がそれ以前の世代よりも上手だと思います。ただし、前章で述べたように「スタートライン」に立っていることが、前提条件でもあります。

前者については、実務経験を積むことが肝要ですが、

最も重要なのは「人々の実態を客観的に理解すること」です。そのためには、教科書で開発学を学ぶことも有効ですが、可能な限り「実態を知っている人から話を聞くこと」および「良質な関連情報に触れること」で、一定の時短を行えます。ChatGPT は「関連情報」らしきことを教えてくれますが、彼は平気で嘘をつきますので（笑）、出典元を必ず確認して「良質な関連情報」のみピックアップすることが必須です。そうしていくと、質問レベルも研ぎ澄まされていきます。このスキル（プロンプト・エンジニアリング）が身に付くと、実務経験をつむべき年数を時短できますが、それでもなお、五感で実態を確認する機会に飛び込むことは、ChatGPT が教えられない一次情報につながります。そういう機会を持つことが難しい場合は、人の話に真摯に耳を傾けたり、プロンプト・エンジニアリングのスキルで乗り切ることが、実効的なオプションかもしれません。

「憧れるのをやめましょう」

最後に、これだけはホントにお伝えしたいと思い、少し強めにキーを打ちます。JICA 職員時代に、某議員が「2 番じゃダメなんですか？」と、国際競争力が高かった研究機関の重要な基礎研究予算を削減しました。とても悲しく感じました。

1 番を目指さないと、2 番になる可能性は低下します。人間は感情に左右される動物です。2 番しか目指さない人は、3 番で満足します。永遠に 1 番はやってきま

せん。国際開発の実務は、正解のない物語に放り込まれる、極めて人間的なシゴトです。順番を付けられる訳ではないので、1 番を目指すかどうかは別問題ですが、他人の国にずけずけと入り込んで、対峙する人の将来を左右するかもしれない重要な局面に、実務者はいとも簡単に巻き込まれます。

なので、どの国際開発機関でも、とても優秀な職員がゴロゴロいます。優秀というのは、単なる学歴ではなく、高い「人間力」を持った方々を指します。人間力は数値化できませんが、国際開発機関には、コスパを忘れてシゴトに打ち込む熱血漢が、老若男女問わず多く存在します。彼等・彼女等は、最高のシゴトを目指さない限り、担う責任の重さを全うできない、と常に真剣に考えているからです。換言すれば、常に「眼前のシゴトで 1 番の結果を出すこと」を目指しているのです。そうしない限り、対峙する人に対して失礼極まりなくなることを、優秀な職員は皆、理解しているからです。そんな「コスパの悪い熱血漢」が多く集まる場所が、国際開発を行う組織です。様々な組織があります。「ICT と開発」は横断的なイシューなので、今やあらゆる組織で必要とされる専門性です。

「国連の会議に出てみたい」「開発金融機関でミッションメンバーになりたい」「J のつく組織で現場に関わりたい」、どれも素晴らしい動機だと思います。ただし、単なる憧れで勤まるほど、国際開発の実務は甘くありません。「憧れるのをやめましょう」。ICT は単なるツールであり、ツールを如何に利活用して社会変化を起

こすのかということが最も求められており、それを主導できる人材は、あらゆる組織において益々必要とされます。憧れではなく、現実自身がそういう責務を担うことをイメージして、バックキャストしながら機会に備えることが何より重要です。

IDPC on MDBs

2024 年 1 月 13 日及び 20 日に、国際開発金融機関(MDBs)に焦点を当てた、国際開発プロフェッショナルコース(International Development Professional Course / IDPC on MDBs) を、英語を使用言語として、オンライン方式で実施しました。IDPC on MDBs の目的は、国際開発機関、特に MDBs に就職することを希望する受講生に、MDBs の枠組みとその基本的業務を解説し、受講生の MDBs への就業を支援するものでした。

受講者のプロフィール

IDPC on MDBs には 21 名が受講しました。今回は初めて日本人以外の受講者も受け入れたことから、海外の 12 カ国・地域から 15 名が参加しました。内訳は、モンゴル、インドネシア、ベニンから各国 2 名、ブラジル、セネガル、台湾、韓国、エチオピア、ケニア、象牙海岸、ナイジェリア、マラウィから各国・地域 1 名でした。日本人以外の受講者の参加は、多国籍の職員と英語で仕事をする MDBs の疑似職場環境を創り出す

ことが出来た事、開発途上国の視点を議論に反映することが出来た事等大きな効果がありました。受講生はそれぞれ就業経験があり、1 名を除き修士号を持つか、修士課程に在籍中でした。また 4 人が既に博士号を持ち、1 人が取得中。それぞれの専門分野は農業、運輸、税務、IT、監査、援助政策などと多岐にわたっており、またすでに国連機関に勤務する受講者もいました。今回は英語の資格を事前に問いませんでしたが、英語での議論も全く問題なく行われました。質問のレベルを見ても開発問題に対する理解と関心が高いことが伺われ、大変優秀かつ経験豊かな受講者でした。国際機関への就職が期待されます。

コース概要

初日は、現在の国際的かつ複合的な危機から生ずる開発課題を理解し、MDBs がそのような課題にどのように取り組んでいるかについて、グローバルな視点から解説しました。このセッションの後、民間セクターを通じて発展途上国の開発を促進する IFC と EBRD の活動を紹介しました。午後には、MDB と受益国政府により、国別パートナーシップ枠組みがどのように策定されるかについての講義が行われ、ベトナムの国別パートナーシップ枠組みを題材として、3 グループに分かれ、ベトナム政府からの 6 つの優先プロジェクトの内 3 件を選ぶ演習を実施し、議論の結果を発表させ、国別パートナーシップ枠組みに関する理解を深めさせました。

二日目のセッションは、ADB 及び IBRD の人事および関連担当者から両行の採用制度及びキャリア形成についての説明から始まり、受講生の 1 人に MDB での模擬面接を体験させ、アドバイスを与えました。その後、MDB のプロジェクトライフサイクル及びプロジェクトマネジメントの講義が行われました。次のセッションでは、意図された開発目標を達成することが出来なかったプロジェクトをケースとしてとりあげ、受講生に過去のプロジェクトの失敗から教訓を学ばせました。プロジェクトの演習に続き、世界各地から参加した MDB のスタッフ（ADB2 名、EBRD1 名、世銀 1 名）との Q&A セッションを行い、西尾昭彦世銀開発金融総局（DFI）担当副総裁からの、IDPC 受講生に対する、特別メッセージのビデオを投影し、コースを終了しました。

個別カウンセリング

希望する 10 名の受講生に対し、1 月から 3 月にかけて、個別のキャリア・カウンセリングを実施しました。カウンセリングは、受講生の専門分野・経験と相談内容を考慮し、もっとも適切と思われるカウンセラーを IDPC の SRID の講師を中心に SRID キャリア開発事業（Career Development Program、CDP）登録講師の中から選出して対応しました。必要に応じ、MDBs の職員等、希望する分野の専門家も紹介しました。

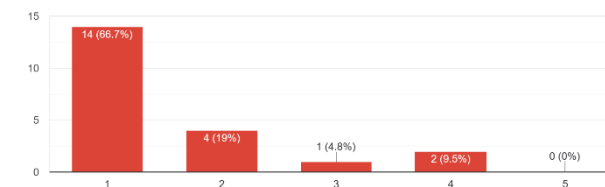
受講生の評価

Google Form を使い全体及び個別講義の評価を行い、

全体の評価は全員、また個別講義は 18 名から得られた回答を分析しました。IDPC 全体の有効性については、5 段階評価の 1（Excellent）と評価した受講生が 67%（21 名中 14 名）、2 の評価が 19%（4 名）と、85% の受講生が高い評価をしています。それぞれの講義内容についてはまんべんなく高い評価でした。人事セッション及び現役スタッフとの Q&A セッションは言うまでもなく、MDBs の現状、プロジェクト形成、IFC/EBRD のセッションが有意義であったとのコメントが多く見られました。また、ケーススタディとしての「国別パートナーシップ戦略」及び「失敗から学ぶプロジェクト」の両セッションは議論を促すものであった点、また実際の状況が理解できた点について高い評価がなされました。個別コメントは受講者の多様な経験・背景を反映して様々な意見が出され、今後の IDPC の企画・実施に大変参考となるコメントが多くありました。

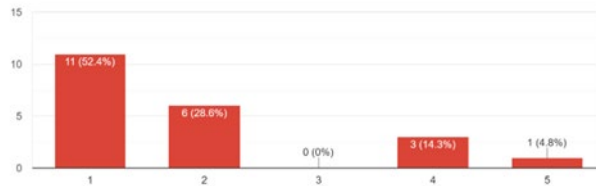
IDPC on MDBs の全体評価（全ての回答において 1 が最高評価）

How do you evaluate the course overall?
21 responses



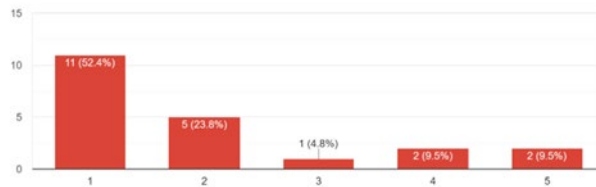
Throughout the course, participants were encouraged to take part in the discussions.

21 responses



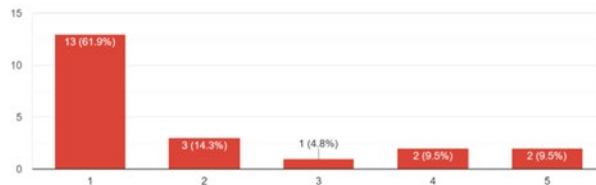
Learning objectives were clearly stated.

21 responses



Contents of the course were relevant for the learning objectives.

21 responses



とができ、MDBs の役割を理解するために非常に貴重な機会をいただきました。また、全ての講義を通して、MDBs で働かれた経験のある方と質問を交えたインタラクティブ形式でやり取りをできたこと自体が、MDBs で働くとはどういうことかをイメージする上で大変貴重でした。

➤ The most valuable aspects for me were the practical insights into international projects, which were new to me. The case studies and the expert perspectives shared in the course greatly expanded my understanding and gave me the confidence to engage in such projects.

➤ The practical explanation about career opportunities and job experiences in MDBs directly from the very relevant sources. Thank you very much to the organizers for the effort to arrange such sessions.

➤ Lectures were based on real world examples; I especially liked the case studies we did (both in Day 1 and 2). I also appreciate the career counseling opportunities. Preparation of country partnership framework is much more difficult than I expected, which is good for me to know the challenge.

➤ Mock interview is particularly useful for me. This pushed me to do a lot of preparation in advance, understood what kind of questions HR may be interested to know, and also gave me confidence for my MDB application.

鈴木博明、IDPC on MDBs 報告書 (鈴木博明、佐藤桂子) からの抜粋

Tool Box : Chat GPT

ChatGPT は、OpenAI が開発した人工知能 (AI) モデルであり、自然な言語処理を行うことができます。このモデルは文章を生成したり、質問に答えたり、対話を行ったりする能力を備えています。ChatGPT は文章の文脈や言葉の意味を理解し、適切な返答を生成することができるため、様々な情報提供やコミュニケーションの支援に役立ちます。

特に文章作成に関する機能に焦点を当てると、以下のような使い方ができます。

➤ 英文編集機能: 文章の校正や改善に役立ちます。文法の誤りや表現の適切さを確認し、より自然な英文 (他の言語も可) を提案します。例えば、「この文をチェックしてください」と依頼すると、ChatGPT は文の調整や修正を提案してくれます。た

受講生のコメント

➤ MDBs で働かれた経験のある方から生の知見をお聞き出来たこと。特にベトナム、フィリピンのケーススタディでは、その国特有の特性や課題を学びながら簡易ながらも解決策を思案する過程を学ぶこ

だし、提案は参考程度とし、正しい判断をする際には自身の英語力も活用しましょう。

ChatGPT は興味深いビジョンを提供してくれるでしょう。

す。(鈴木博明 SRID キャリア開発事業運営委員長、「SRID キャリア開発」編集部)

➤ 英文要約機能：長い文章を短くまとめるのに役立ちます。主要なアイデアや情報を抽出し、要約文を作成します。例えば、「この記事を手紙の形で要約するように」と指示を与えれば、ChatGPT は記事の要点を簡潔にまとめてくれます。ただし、要約は元の文章の理解を補完するものであり、全体の文脈をよく考慮することが重要です。

➤ 言語学習支援：新しい言葉の意味や文法の解釈に関する質問に答えたり、英語の表現を教えてもらったりするのに適しています。例えば、「“cooperation” と “collaboration” という言葉の意味の違いは何ですか？」と質問すれば、ChatGPT はその説明をしてくれます。

他にも次のような機能もあります。これらはほんの一部で、データの分析の補助にも使えます。

➤ 質問応答：ChatGPT は、一般的な知識から特定の情報まで、さまざまな質問に答えることができます。例えば、「宇宙には何個の惑星があるか？」と尋ねると、ChatGPT はほぼ正しい答えを生成します。

➤ 文章生成：ブログ記事、物語、詩など、さまざまな種類の文章を生成するのに役立ちます。例えば「未来の世界を想像してみてください」と依頼すると、

ただし、利用する際には注意が必要です。ChatGPT は自動生成された情報を提供するため、必ずしも正確性が保証されるわけではありません。特に専門的な知識や重要な決定に関しては、信頼性の高い情報源と照らし合わせることが重要です。また、個人情報や機密情報などの共有には十分な注意を払うよう心がけましょう。(鈴木博明)

編集後記

「憧れるのをやめましょう」と言われても、解決すべき課題に対して有効活用可能な ICT (技術) の選択肢と組み込み方を簡単に見つけることが出来る、デジタル・ネイティブ世代には羨望を抱きます。「開発課題を客観的に分析する能力」では、長く開発業界で七転八倒してきただけに、デジタル・ネイティブ世代には負けないつもりですが、ICT は開発課題の解決にこれまでに知られている方法・手段を超えた、あっと驚くような解決策をもたらしてくれそうな気がします。筆者も今年を個人の DX 元年と宣言し、習うよりは慣れろで、本号の Toolbox Chat GPT の記事は、Chat GPT を使って作成してみました。「なかなか、やるではないか」と言うのが正直な感想です。遥か先に霞んで見えるトモ先生の背中を、遅まきながら、ポチポチ追いかけて

The image you requested has been created, capturing the inventive process of a primary school student in the near future. This visualization emphasizes the engagement between the student and ChatGPT, as they work together to conceive a design for a mansion that beautifully merges with the surrounding nature, situated atop a pond. The layout adheres to the specified 1:2 aspect ratio, showcasing both the student's interaction with the PC and the detailed architectural plans that emerge from this creative endeavor.



「近未来の小学生が AI で浮殿を設計する図」

ChatGPT に指示して作画させました。
英文は ChatGPT からのレスポンスです。

(©山岡和純)